令和４年度岐阜県博物館協議会議事要旨

１．　日時　令和４年 12 月 15 日（木）14:30～16:00

２．　場所　岐阜県博物館　講堂

３．　出席委員

有賀　信彦　　中日新聞岐阜支社長
太田　朋代　　岐阜県ＰＴＡ連合会子育て委員
春日井恵子　　大垣市立静里小学校校長
河井　洋子　　中部学院大学・中部学院大学短期大学部付属桐が丘幼稚園園長
幸脇　晴美　　公募委員
清水　啓子　　岐阜県博物館サポーター
鈴木　薫　　ＮＨＫ岐阜放送局長
髙木　俊徳　　岐阜新聞社取締役事業戦略局長
古川　秀昭　　前岐阜県美術館長

４．　開会

（１）　開会

・12 名中９名の出席により、本協議会は成立。

（２）　館長挨拶

５．　議事要旨

（１）会長選出

委員からの推薦なく、事務局より古川委員を提案。
委員からは異議なし。古川委員、会長就任を承諾。

（２）会長挨拶

皆さん、スムーズに、そして来年度の博物館にとって、よい活動につながるような会にしたいと思う。
現在開催中の恐竜の平面と立体の面白い、美術館がやるような展覧会がスタートしたが、その開場式で、博物館が関わっていた調査研究の中で、新種の恐竜の発表があり、世界にわたる大きな話題となったと聞いた。
前々から、県内にいろいろなものがあり、その調査研究をもう一歩というところまでしているが、その上澄みだけを東京や京都の研究員がそれを発表するという状況を残念に思っていた。
今回は、博物館の学芸員がほかの機関の研究者とともに調査研究を進めたという点がすごい。また、今度の博物館法の改正の中にも連携した研究という方向が出ているが、その端

緒となるようなことに県博物館がなったことはすごいこと。
岐阜県にこだわっているがゆえにここでしかわからないことが、全国に、世界に影響をもたらすということになる。また、地元の子どもたちが将来、自分たちの故郷に何かあるかもしれないと思うこと、学芸員の誕生していくような雰囲気ができるとよい。

（３） 報告事項：県博物館の現状と実績について
「岐阜県博物館の現状と実績」、「博物館機能の全県展開」、「岐阜県博物館の現状と展示データ」を説明。

＜質疑＞
（古川会長）
今、職員は何人いるのか。
（事務局）31 名である。
（幸脇委員）
教員のための博物館の日は何日か、利用者は何名か、参加地域はどうか。
（事務局）
今年度は、7/26-29 の 4 日間、午前 9：15～12：00、学校団体の利用説明会を兼ねて実施し、150 人が参加。
関市が最多、他に羽島、本巣、遠方では恵那から、県内各地から来てもらっている。
また、小中学校のほか高校・大学の研究者も参加されている。
（古川会長）
卵殻化石の研究について経緯を説明されたい。
（事務局）
当館にもともと採集されていた化石がいくつかあり、当初は違う生物として発表されていた。卵殻化石の研究をしている筑波大教員・学生と当館学芸員が再研究し、その結果、一部がカメで一部が恐竜であることが分かったものである。昨年、学会での口頭発表に合わせて県庁で報道発表。今年度は学術誌受理に合わせて報道発表した。
（古川会長）
このようなことは、次の展開の力になる。

（４）協議事項：これからの岐阜県博物館　―改正博物館法の成立を踏まえて―
（事務局）
・来年４月から施行される改正博物館法について説明。
・岐阜県博物館のデジタル・アーカイブに関する取組みについて報告。
収蔵品をデータベースで管理。所蔵している登録資料約 14 万件、そのうち公開データはホームページで確認できるもの 589 件、ポケット学芸員という音声ガイドで 73 件となっている。
昨年度からであるが、アフターコロナということで、ＤＸを進めている。ホームページのサーバーの強化、ウェブコンテンツの作成、zoom 環境を整備しリモート授業やオンラインでの講演会、講座（中・高生向けの「めざせ！研究の☆」）などを実施。
令和４年度のＤＸ事業としては、データベースの機能強化、ホームページの改修を実施。

ホームページでは、おうちミュージアムとしてオンラインで岐阜県博物館を楽しんでもらえるコンテンツを充実させた。

イベントのオンライン受付について、logo フォームを導入。

恐竜のＡＲ及びＶＲコンテンツを作成。また刀剣鑑賞のコンテンツを作成中である。

＜質疑＞

（古川会長）

これはデータ作りが大変、いつ頃から始めていたのか。

（事務局）

データベースは 10 年以上前からあった。公開するのに積極的になったのが最近。ホームページの修正は、ご意見を聞きながら改善している。

（幸脇委員）

ポケット学芸員は愛用している、来館しなくてもネットで利用でき、楽しい。

（高木委員）

十数年前に委員であった時の協議会で、デジタル化を進めるための準備を勧めたが、徐々に形になっていると感じた。

今後は、アクセス数や利用者の属性、利用の多いトピックなどの分析をするとよい。

オンラインは、国や時間、生活スタイルを超えて通信できるので便利と実感。今後、英文等での発信も検討されたい。

博物館に眠っている資料などは、大きな役目を持っている。性別・年代ごとなど、きめ細やかに利用者の声を聞き、県博があってよかったと思ってもらえるような事業展開を、是非とも進めて欲しい。

（春日井委員）

昨年度の協議会後、本校でもオンライン授業をしてもらった。

４年生の総合的学習で、大垣市のハリヨや水生生物を学習し、その時、画面で恐竜を見て、低学年時に秋みつけできたことのある子どもが、「来たことがある」など喜んでいた。その後、母親と行ったと話していた。

バス利用での博物館への社会見学は６年間で１回、何度も行くことは難しく、中・高学年は行かない。オンラインでみた大昔のくらしなどは、小学校中学年以上の児童が興味を持つ。

児童はタブレットを利用し、国外ともオンラインで通信するなど慣れている。

オンライン授業をやってもらえると、かつて行った子たち、初めての子たちも興味を持つのではないか。

ただし、ホームページを見ただけでは、６年生の子たちが大昔のくらしをオンラインで学べるということがわからない。教員は、社会見学などを考えるときに、ホームページで情報収集する。団体利用からリンクを貼り、どこの学校でこんなことをやったという紹介をしてもらえると、同じようなことをやりたいと問い合わせがあるのでは。

（古川委員）

メディアを生かして広がっていく、そのような視点でご意見を。

（有賀委員）

全県展開モデルとはいえ、東濃への展開が欠落しており、東濃でも展開してほしい。関市民が現代陶芸美術館が多治見市にあることを知らないように、東濃の人は岐阜県博物館が関市にあ

ることをあまり知らないのではないか。まず、岐阜県博物館を知ってもらうために東濃でも活動をするとよいと思う。

パレオアート展、このタイトルでは何が展示されているかわからない。副題としてパレオアートが入るのはよいが、特別展の主題が「学術的に正しい恐竜の絵」というポイントがわかるタイトルとすべきである。「めざせ！研究の☆：技術を仕事にする方法」は、ぱっとわかるし、面白そうと思わせる。タイトルひとつで、行ってみたいと思うかどうかは変わるので、工夫してもらいたい。

（鈴木委員）

荘川での恐竜の新発見は、心強い話題で、学芸員も上手に広げていると思う。

今後、岐阜で恐竜がさらに発掘されて行くのであるなら、10 年スパンで、よりエッジを立てていくなら、「恐竜博物館」で売っていくとわかりやすくなる。空宙博（岐阜かかみがはら航空宇宙博物館）や福井県立恐竜博物館と併せて旅行に来てもらえるようになるとよい。もともと岐阜県の歴史から自然までオールラウンドに集め、それぞれ充実しているが、まず人をキャッチするということであれば、恐竜はキャッチーでファンが多いジャンルなので、そのようなやり方も有効であると思う。

常設展を見たときに、岐阜県の歴史のコーナーを興味深く見た。本でみたことがものと一緒にありよく分かった。しかし、説明パネルで昔のものと最近のものとで表現が違うことや、大人が読んで理解がギリギリな内容であったことが気になる。子どもを含めターゲットによって、整理してもよいのではないか。

（幸脇委員）

若き頃、岐阜県博物館に勤めていた。当時の解説ノートや展示案内を見て、改めて岐阜のすばらしさを県民に知ってもらいたいと思った。特に子どもたちに岐阜県のすばらしさを知ってほしい。子ども用ホームページがあるとよい。東京国立博物館のポンペイ展のジュニアガイド版はわかりやすい子ども向け。岐阜市歴史博物館の協議会委員をしているが、市歴博の HP に高学年用・低学年用クイズがある。子ども用の展示図録があるとうれしい。

中高生の来館が少ないそうだが、小学生には賞（来館の特典）があるといい。興味ある専門的な分野を勉強し、子ども学芸員を目指してほしい。舟来山古墳群では、13 歳の学芸員（新聞記事）とあるが、小学 4 年のころから研究を続けている。

社会科副読本「新しい岐阜県のくらし」の中の資料と県博の展示をリンクさせる。棚橋源太郎は教育教材としての博物館の必要性を訴えている。

上毛かるたは「群馬県をよく知り郷土を愛するようになってほしい」ために制作。岐阜も美濃飛騨かるたを作り、県博の展示とかるたの文を関連づけて、岐阜県をよく知り今以上に郷土愛をもってほしい。

（太田委員）

保護者の立場から感想を述べる。先日、開場式に参加したが、パレオアート展を学芸員の解説付きで見学した際に、ぜひ子どもにも体験してほしいと思った。親と一緒に見ても「見学する」で終わるが、解説を聞きながら見学すると深く興味を持てるのではと思う。

小学校の遠足から家に帰って、親と一緒に再訪するというのは、春日井委員の言われるとおり。最初から保護者が連れて行くことは、保護者によほど興味がないと情報を得て来館しようとはならない。親は学校からもらってきた連絡には目を通すので、県博の情報があれば「行こうか」

となる。

中高生の来館が少ないという話であるが、スマホ・タブレットを通して情報を得る機会が多いのがこれからの子。何か興味をもった時に質問することができ、学芸員からリアルタイムで返事が来るようなシステムがあると、より興味を持ち、来館につながるのではないか。

（清水委員）

県博事業を知っているようだが、今日、多くの事業をやっていることに驚いた

活動の中で多くの子に接するが、単発で終わり、第二弾、次の段階への動機づけが弱い。職員の負担をこれ以上増やすのは心苦しいが、例えば、ひとつのテーマでの連続講座で子供の関心を高めるのはどうか。学芸員から直接学ぶ、例えば、発掘現場の見学、植物採集。学芸員の人柄にふれて話を聞くと、私の年齢でも、よかった、もっと調べようと思う。リモートの良さもあるが、実物に触れる・深めるサイクルも大事。

たくさん種まきをしているので、対象は少なくなるが連続講座など深い内容の催事を。子どもの将来によい効果となる。

（古川会長）

友の会のメンバーは、今、何人くらいいるのか。友の会で集まることはないのか。

（事務局）

200 人弱。以前はバスツアーも企画されていたが、現在はコロナの関係もあり実施していない。

（古川会長）

美術館では、展覧会の受付や一部、作品の計測などの手伝いもしてもらっていた。

（事務局）

全県展開の実施状況については、報告事項の中で述べたが、一つ付け足しを。改正博物館法施行に向けて、当館は特別何かをしてきたわけではないが、全県展開事業は、改正の方向にピタッと適合していた。11/7 コレクション管理研究会（会長法政大・金山喜昭教授）で全県展開の取り組みを発表したが、研究者・他館学芸員から「これからの本流となりうべき」と高評価を得た。一例として、NHK ワールド　恐竜すす払いニュースで、幼稚園との交流をご覧いただきたい。

（古川会長）

データベースで、オンラインで体験した人が「博物館に行こう」と、そこに結び付けられるとよい。デジタル化の流れが本末転倒とならないように。

（河井委員）

毎年秋見つけで利用、園児たちは恐竜レプリカに素直に驚く。

関市在住の子どものいる職員に聞き取りしたところ、県博は「敷居が高い」、学術的価値の高いものがあって行きづらいなどの感想。

行きづらい印象を解消するため、他委員の意見にもあったタイトルや展示方法の工夫を。

わかりやすい展示、身近なものにするのが課題。恐竜のすす払いは、まさに身近なものになった手立て。そのような手立てがたくさんあるとよい。

（幸脇委員）

ホームページに質問コーナーはあるか。

（事務局）

セキュリティのため設定していない。メールでお問い合わせに答える形で対応している。

6　令和５年度岐阜県博物館展覧会計画（案）

（事務局）

「令和５年博物館展覧会計画（案）」を説明。

7　副館長挨拶

8　閉会